

Somos Róbert

*Logika és érvelés Órigenész műveiben*

(シヨモシュ・ローベルト 『オリゲネスの著作における論理学と推論』)

Catena monográfiák 12, Budapest: Kairosz Kiadó, 2011, pp. 248,

ISBN 978-963-662-455-2, ISBN 1587-2599, A/5, 3200 Ft.

秋 山 学

本書は、オリゲネスが論理学をいかに意義づけているか、彼の中で論理学がいかなる役割を担っているか、彼がいかなる方法で論理学・学的理論の手続きを用いたか、論理学の道具立てをどこから入手したか、彼がいかにしてまたどのような知的水準において推論した議論しているか、といった問題に回答を与える斬新な試みであり、ハンガリーのペーチ大学教父学研究センターとカイロス出版社の共同企画による「カテナ単行本シリーズ」の第12巻として刊行されたものである。すでに本誌において評者は、同シリーズの第1巻、やはりシヨモシュ氏による『アレクサンドリアの神学』（2001）について書評を行っている。本書は同氏によるシリーズ2冊目のモノグラフであり、オリゲネス研究者としての氏が、前著に続き、10年を経た本年、オリゲネスに特化して公にした研究である。

シヨモシュ氏に関しては、すでに上掲の本誌第48号に略歴等を記しておいたので参照されたい。2010年から、氏はBaán István師に代わってハンガリー教父学会（Magyar Patrisztikai Társaság）の会長を務めておられる。忘れられないのは、ペーチ大学の学部長職にあった氏と2006年春にお目にかかった際、「毎朝『ケルソス駁論』を訳すのを日課にしている」とおっしゃっていたことであり、この『駁論』のハンガリー語訳もカイロス社から2008年に公刊されている。本書はこのような多忙な期間を縫い、各種の学会で発表されたオリゲネス関係の論考を集成したものであり、シヨモシュ氏の緻密にして重厚な思索が、硬質なハンガリー語を通じて伝わってくる力作である。

題目から察せられるように、本書はオリゲネスの論理学的側面に着目した研究

として特筆される。ご本人によれば、これは「(いささか) 無味乾燥な (száraz) テーマ」であるということになるが、オリゲネスを聖書解釈学や教理神学史の立場からではなく、哲学の立場で論じようとする場合、決して避けて通ることのできない領域であると言えるだろう。以下、本書の目次を通じて全編の紹介を試みたい。

まず「前書き」と「序論」に続き、第1章「理論と実践としてのキリスト教」は第1節「オリゲネスのテキストにおける理論と実践」、第2節「実践に対する理論の優越性という観点」に分かたれる。第2章「オリゲネスによる論理学の定義と意義づけ」は、第1節「先駆者たち：アレクサンドリアのフィロンとアレクサンドリアのクレメンス」、第2節「オリゲネスによる論理学の定義」、第3節「論理学の意義づけ」に分けられる。第3章「神の力・奇跡と合理性」は、第1節「神の力と『コリント前書』2章4—5節」、第2節「奇跡の本性に関する記述」、第3節「神の力とその証拠」に分かたれる。第4章「『諸原理について』における論理学と学的理論」は、第1節「神学の学的理論構造：原則」、第2節「神学的学問の展望」、第3節「神学システムにおける弁証法の位置」、第4節「解釈」に分割される。そして第5章「解釈のための基礎的核心：同音異義」は、第1節「同音異義の本質」、第2節「オリゲネスにおいて、なぜ同音異義の理論が見当たらないのか」、第3節「ニックネーム (愛称)」に分かれる。第6章「『ヨハネ福音書注解』における論理学と学的理論」は第1節「『ヨハネ福音書注解』における論理学と学的理論の基礎概念」、第2節「オリゲネスにおけるアリストテレスの学的理論の動機」、第3節「学的理論の観点から見たオリゲネスの著作群における『ヨハネ福音書注解』の位置」、第4節「『注解』の序説の問題」、第5節「オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』における学的方法」に分かれ、さらにこの第5節は「1. テキストと意味の再構築」「2. 論理学とテキスト解釈」「3. 論理学, 学的理論, 神学」に分かたれる。そして第7章「弁証法と推論の理論：議論するオリゲネス」は、第1節「議論の状況と論敵」、第2節「教説と回心」、第3節「教会の内部における議論」、第4節「オリゲネスによる異端論駁の論争」、第5節「オリゲネスの議論の戦略」に分かれ、さらにこのうち第3節は「1. ヘラクレイデスとの議論」「2. ユリウス・アフリカヌスとの議論」に、また第4節は「1. ヘラクレオンとの論争」「2. 『諸原理について』第2巻4—5」に小区分される。第8章は「『ケルソス駁論』における推論の戦略」と題され、第1節

「論理学、弁証法、弁論術」、第2節「疑問、叫び、呼びかけ」、第3節「ケルソスによる真の陳述の資格」、第4節「正確化されるべき陳述」、第5節「誤った事実措定と不適切な評価」、第6節「推論上の誤謬」、第7節「論駁の展望」に分かれたれ、このうち第6節は「1. 弁証法上の規則に対する違反」「2. ケルソスの立場の支離滅裂性」「3. ケルソスによる誤った推論」に小区分されている。そして終章の第9章は「論理学の源泉問題をめぐるオリゲネス」と題されて、第1節「オリゲネスの神学の一般的観相学：中期プラトン主義」、第2節「ストア派の論理学がオリゲネスに及ぼした影響の措定」、第3節「オリゲネスにおける一般的ストア派論理学の概念：ロバーツとリストの解釈」、第4節「『虚偽の論』（『ケルソス駁論』第2巻20）」、第5節「二つの条件から成る公理（『ケルソス駁論』第7巻15）」、第6節「『ヨハネ福音書注解』：ヘイネの解釈」に分かれ、この終節はさらに「1. 『ヨハネ福音書注解』第2巻」「2. 『ヨハネ福音書注解』第20巻」「3. 『ヨハネ福音書注解』第32巻：子と父の栄光化」に区分されている。これに「総括」が続き、「略号、典拠」および「参考文献」が付されている。

各章の内容をまとめるならば、第1章では、理論と実践の関係において、アレクサンドリアの神学者オリゲネスがいかなる見解を表明しているかが検証される。第2章では、オリゲネスが人間の知の中で、論理学ないし弁証論のためにいかなる位置を付与しているか、どのような形でその本質を規定しているか、そしてその方法に関してどのような価値づけを行っているか、といった問題に回答が与えられる。第3章では、オリゲネスにあって、不合理という意味で捉えられた奇跡は存在しないということが示される。第4章では特に『諸原理について』がテキストに採り上げられ、組織的・科学的神学の創設をめぐってオリゲネスが、まず神学に関しては使徒的教説の啓示のうちに出発点を見出し、教義に関しては原質料として役立つ聖書テキストの批判的検証により神学的議論のために適切な状況を作り出し、一方テキスト解釈と論理的手続きの適合性により理性的かつ可働的な神学事例を構築した、ということが実証される。第5章では、オリゲネスにおいて象徴性の主たる意味が、ごく自然なあり方で同音異義語と関連づけられているということが示される。第6章では『ヨハネ福音書注解』に基づき、論理的ならびに学的理論の関連を総括する試みが行なわれる。第7および第8章では議論するオリゲネスの姿が示され、特に後者においては『ケルソス駁論』における推論的戦略が分析される。そして終章の第9章では、オリゲネスの論理学的源泉の

問題が検証に付される。これまで通説では、オリゲネスは論理学をめぐり、ストア派からこれを学び取ったとされてきた。これに対して著者は、ストア派、ペリパトス派、プラトン主義による論理学を相互に区別することが困難であることを前提として、オリゲネスのうちに、人的交流を別にすれば、それ以前のあるいは同時代のストア派論理学からの影響を直接に跡づけうる証拠を見出すことが不可能であることを指摘するとともに、むしろ彼が哲学分野に関して最もその影響を受けた中期プラトン主義のうちに、彼の論理学の源泉をも求めるべきであるとの説を提示する。

本書は前著と同様、文献学的であると同時に思索的であり、先行研究を丹念に踏まえながらも独自性を打ち出すシヨモシュ氏の学風を十分に現したものと評価できる。ところで、シヨモシュ氏は全9章より成る本書のうち計3章分ほどに関して、各種学会において英語で口頭発表したものを基にしている。それらは既刊書に収められており、その内訳を示すと、著者自身がペーチ大学の同僚である Heidl György 氏と共同編集した *Origeniana Nona* (2009, 327-335) にまず第1章の英語版が掲載されている。また第6章に関しては *Origeniana Octava* (2003, 547-552) および E. Prinzivalli 編による *Il Commento a Giovanni di Origene: il Testo i suoi contesti* (Quaderni di Adamantius シリーズの第3巻, Verucchio, Pazzini Editore, 2005, 157-175) に、一方第3章はローマのアウグスティニアスムから公刊された *Studia Ephemeridis Augustinianum* 96 (2006, 711-724) にそれぞれ収録されている。

こうしてみると、ハンガリーを代表するオリゲネス学者としてのシヨモシュ氏の業績を総覧するためには、やはり英語による単発での研究発表に期待するだけでは限界があり、ハンガリー国内の諸学会で公表される研究成果にも十全に注目する必要があることは明白であろう。このたび本書が、全編ハンガリー語によるモノグラフとして公刊されたことで、シヨモシュ氏によるオリゲネス研究の方向性と意図の全貌がわれわれの前に明らかにされたと言えるだろう。ハンガリー語と同じく国際性を持たない日本語を母語とするわれわれにとって、シヨモシュ氏による研究公開のあり方は、ひとつの指針を与えるものとして十分先駆的である。同時に、本書が提起する諸問題は、使用言語の垣根を越え、哲学・神学・聖書学その他さまざまな分野を横断する教父学の研究学徒に多大な示唆を与えるものであるということを、最後に改めて強調しておきたい。